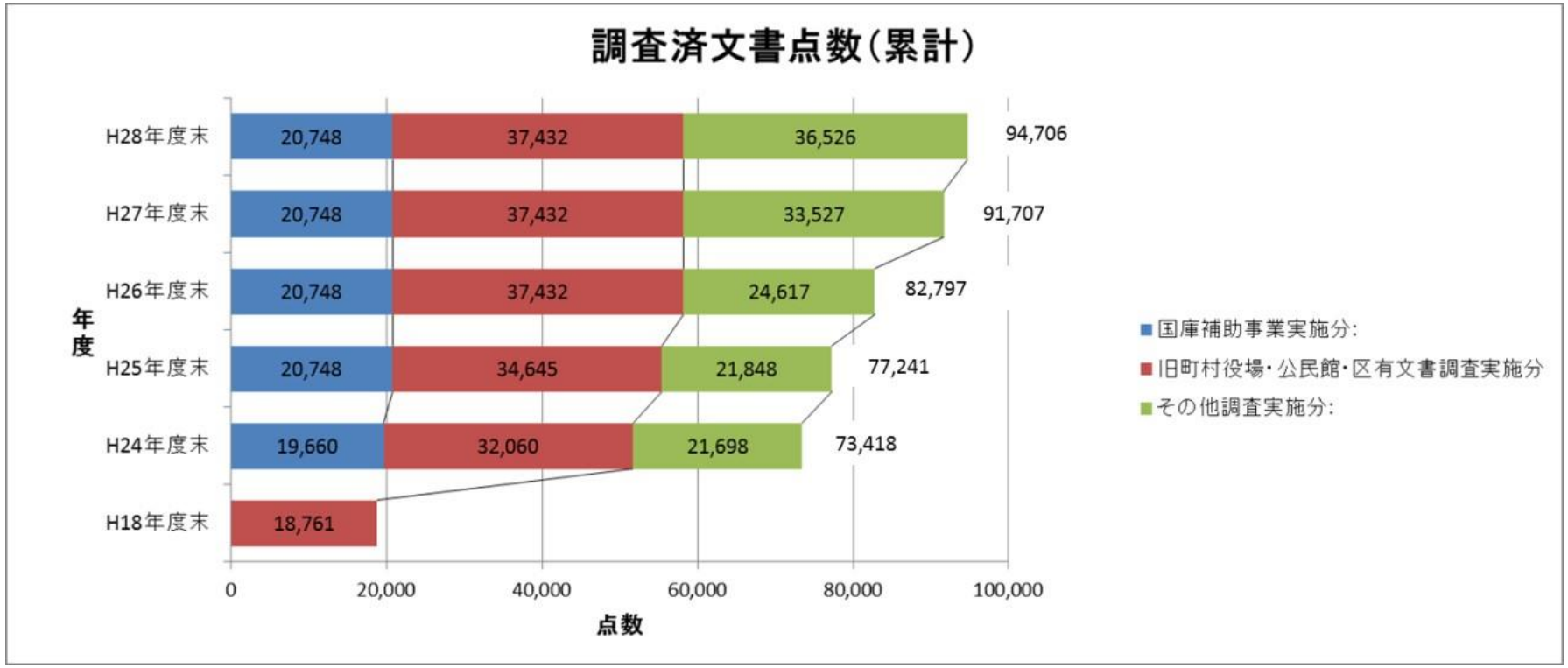
第 68 回　歴史史料と郷土愛

『松江市史』は史料編・通史編・別編合わせて全１８巻を予定している。ちなみに今年度は１３冊目となる別編「松江城」を発刊予定である。半分以上が既に刊行済だ。この間に『松江市史』を編纂するため、多くの史料が収集され、専門職員による調査が行われてきた。それらの累計をグラフで表してみた。



松江市史編纂事業が始まって以降、確実に増加している。

つまり、『松江市史』を編纂するために探し、発見されたということと、市民の方々が関心を持ち、調査の依頼がきて増加したものだということがうかがえる。

史料編纂課の稲田課長は「合併前に宍道町単独で調査を行った点数が約１８，７６１点あって、人口比から単純計算すれば、合併した松江市においては４０万点くらいあるのでないか」という見解だ。実際、新しい史料が見つかったので読んでほしい、確認してほしいという問い合わせは少なくない。

これらの収集された史料について、５月に開催された松江市史編集委員会では、適切な形で保存・散逸防止に努めるとともに、広く公開・活用できるような環境を整える必要がある、松江市に独自の公的機関として公文書館を立ち上げる必要がある、という提案があった。

そこで、「もし松江に公文書館ができたなら」と想像してみた。

◆現在見つかっている史料を適正に保存・管理することができる。
◆先に述べた、まだ見つかっていない歴史史料の収集・整理・調査・研究が可能となる。
◆（他県の公文書館のように）市民に史料を公開できる。

私が特に大切だと感じたのは、三つ目の「公開」についてである。

編集委員会の中で紹介された他県の文書館のホームページを見てみると、所蔵史料による企画展が行われていたり、歴史教科書の内容に合わせてピックアップされていたり、絵図データを惜しげもなく公開していたりする。子どもたちが夏休みの課題研究などにも活用できそうである。

そんな私自身も、中学生時代に身近な古墳を調べてまとめた覚えがある。その時の興味を突き詰めていけば、史料編纂課に事務以外でも貢献できたかもしれないのだが、気はそれてしまった、子どもは多感なお年頃でもある。身近で気軽に史料を見ることができ、学校の調べ学習などで使用できるならば、「おもしろそう」と興味を持つきっかけになるだろうし、地元への愛着心も育むことができそうだ。

そう、この地元への愛着心が、松江市史編纂には欠かせなかったのではないだろうか。私が史料編纂課にいて驚いたことは、松江市史が編纂されていく上で執筆される先生方はもちろんのこと、研究熱心な一般市民の方が多いということだ。「史料を調査してほしい」という依頼には、貴重な発見があるかもしれないという思いと、調査を行い松江市の歴史として保存して後世に伝えてほしいという願いとが根底にある。皆さんの「松江が好きだ」という思いを感じた。

この地元愛がどうか生かされるかたちになってほしいと願う。

（松江市史料編纂課／岩町紀子／2017 年８月 24 日記）